



Title	『絶滅した日本のオオカミ—その歴史と生態学』 ブレット・ウォーカー [著] ・浜 建二 [訳] (北海道大学出版会, 2009年, 329頁, 5,250円)
Author(s)	大館, 智氏
Description	書評
Citation	哺乳類科学, 50(2), 246-248
Issue Date	2010
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/44600">https://hdl.handle.net/2115/44600</a>
Type	article
File Information	50_246.pdf



ある。研究者との出会い、現地人との出会い、時にはたまたま車内で知り合った出会いなんていうのもある。「モグラ博士～」でも述べられていたが、人との出会いを如何に大切にするかがその後の調査をスムーズに継続させる重要なポイントである。各章とも、時に現地人との和やかな写真が挿入されており、氏のモットーであるコミュニケーションの大切さを実感できる。特に言葉がスムーズに通じない海外では、心の通い合いが大切なようだ。時にはお酒の架け橋を渡りながら…。

次は何といってもモグラが棲息する現地環境である。どんなところにモグラはトンネルを掘り生活しているのかを見極めていかななくては、モグラを手にはできない。氏は、多くの経験の中でそのモグラの生活を瞬時に見抜く才能を磨いていったのだろう。赴く場所によって土壌硬度や植生、傾斜等が異なるもので、その土地土地ごとにトンネルの見つけ方やワナの掛け方を工夫しなくてはならない。不思議なことに「モグラ博士」「モグラ～」を読み進めていっても、氏がモグラ捕りに悉く失敗したというのはあまり見受けられない。もし失敗したとしても、次は必ずやモグラを仕留めている。このあたり、フィールドに鍛えられた賜物といっていいただろう。こうしてモグラを各地で手に入れた氏は、染色体を調べ、形態を調べ、生態を調べて様々な知見を積み重ねていき、アメリカヒミズの系統的独自性や台湾における新種ヤマヂモグラの発見など、多くの成果をあげていくのである。それはまさに汗と血と泥にまみれた成果であるのだが、新たな発見とそこから始まる仮説の検証という意味合いでは、まぎれもなく「モグラ科学」だろう。

昨今は論文至上主義の研究行政が横行し、合理的に研究を進める輩が増えすぎている。簡単にいえば、分担作業になりすぎているのである。筆者もこの傾向に懸念を感じているのだが、川田氏の2冊を読んで胸を撫で下ろした。氏の本の読者は少なくとも、懸念されている様な事態に陥ることはないだろうと信じたい。外に出て、現物を見て、現地の空気を吸い、全神経を研ぎ澄まし、そしてそこから謎解きに入る。これが生物研究の基本のはずだ。「モグラ～」のあとがきに「僕のこれまでの活動を支えてきたのは、情熱とか努力とか根性とか言う、とても古く美しい言葉で表される精神的な部分である」という一文が記されている。古来より、日本人の美学はこの古くて美しい言葉に支えられてきた。最短距離を歩く分担研究も大事だが、額に汗して達成する遠回りな研究も実にエクセレントである。自分自身の研究を見つめ直すきっかけにもなった2冊であった。

岩佐真宏（日本大学生物資源科学部・野生動物学研究室）

✉ iwasa.masahiro@nihon-u.ac.jp

### 『絶滅した日本のオオカミ—その歴史と生態学』

ブレット・ウォーカー [著]・浜 建二 [訳]

(北海道大学出版会, 2009年, 329頁, 5, 250円)

この本の著者はアメリカのモンタナ州立大学の少壮の歴史学の教授で、かつて北海道大学に留学していた。著者は文献調査のみならず現地調査でのインスピレーションを大切にする研究者のようで、私はこのような研究姿勢に共感を覚える。本書では日本のオオカミが日本人(和)人やアイヌ人からどのように扱われ、オオカミ観がどのように変遷してきたかを歴史学の立場から分析している。そしてオオカミ観の変遷が絶滅と深く関与していることを考察している。

著者によれば、ニホンオオカミの分類名は日本の帝国主義的發展に伴うナショナリズムの成立と西洋化政策(西洋科学の本格導入)と深い関係があるという。明治以降、日本はリンネの分類体系を導入したが、それと同時に日本の支配領域の増大にしたがい、日本や朝鮮半島に「固有」な種や亜種をさかんに記載しようとする社会的風潮があった。この事実は、科学的活動でさえ、学界のみならず帰属する社会やその時代の思想的影響を受けていることを示す好例であろう。

オオカミをめぐる分類学的問題として「ヤマヌ」問題がある。1826年にシーボルトが大坂で購入したイヌ科動物には「ヤマヌ」と「オオカミ」があったが、オランダのライデン自然誌博物館には、このうちのヤマヌだけが到着し、テミンクはこれに基づきニホンオオカミ *Canis hondophilax* を記載した、と著者は書いている。しかし、これは事実誤認であり、ニホンオオカミの原記載にはライデンに送られた3頭とも使われている(川田伸一郎氏の指摘)。小林(2005)によれば、原記載に使用した3頭のうち、1頭は大型のもので他の2頭は小型のもの(そのうち1頭には明らかに *Yamainu* とラベルに記載)であるが、テミンクはこのサイズ変異を知りながら「ヤマヌ」と「オオカミ」を込みにしてニホンオオカミを命名・記載したらしい。いずれにせよ、標本購入当時の日本ではオオカミとヤマヌとは別のものと認識されていたので、ニホンオオカミの分類記載にはヤマヌとは何かが重要になってくる。江戸期までの日本ではヤマヌには漢字の「豺」(さい)を当てはめることがあるが、本来、豺は現在の日本には産しないドール *Cuon alpius* のことである。ではヤマヌとはなにか? 著者および先行

する日本人の研究者によれば、野生のオオカミと家畜の犬（本土の在来犬とアイヌ犬）の間には交雑が行われ、オオカミの集団にイヌの遺伝子が、日本在来犬の集団にはオオカミの遺伝子が流入したらしい。もしそうならオオカミと在来犬は厳密には分離不可能である。さらに著者はホンデオオカミ（ニホンオオカミ）の小型化の要因の一つは家畜イヌとの交雑にあるのではとしている。そして著者は、ヤマイヌとは、オオカミとイヌの雑種のバリエーションではないかとしている。日本のオオカミが絶滅した今となつてはヤマイヌ交雑起源説の是非についての判断は困難である。

さて、本書の“売り”であるオオカミ観の紹介に移ろう。大和民族にとって狼は荒ぶる神、益をもたらす神としての大神（オオカミ）であった。オオカミは大口の真神や御犬さまとも呼ばれ、農耕主体の大和民族にとっては農作物をシカやイノシシの害から守ってくれる益獣であった。一方、狩猟が重要な糧の手段であるアイヌ民族にとっては規範とすべきハンターであるとともに、オオカミ始祖伝説もあり神聖化していた。しかし、江戸後期の1830年代に長崎経由で狂犬病が日本に入ってきてイヌ科動物に蔓延し、感染した狼が人を襲ったことから、日本でもオオカミに対する負のイメージが始まった。ただ、この段階では、撲滅という極端な発想は無かつたらしい。オオカミの根絶活動は明治の近代化（西欧化）政策により、近代牧畜技術と家畜加害獣への対処法が導入された時に始まった。そして江戸期後半の儀礼的オオカミ狩りとは規模・目的が異なる、近代化の指標としての国家事業として、撲滅が開始されたという。このように、オオカミ観の変化によりオオカミは日本の近代化のスケープゴートにされたともいえる。

明治以降の北海道の生態系において、シカ、ウマ、オオカミ、ヒトが織りなす4者関係があった。明治期におけるシカの大量死とそれに伴う食糧不足を補うためにオオカミが馬産地の日高地方へ移動したために、人とオオカミの軋轢が顕著になり、オオカミ撲滅を積極的に推し進めるきっかけとなった。特に北海道はアメリカ人の指導により開拓、近代化が推し進められたので、オオカミ撲滅を重要な政策としていたアメリカの手法を直輸入したことが悲劇をよぶ原因となった。その効果的な撲滅法とは賞金制と毒薬ストリキーネの使用である。本書では、オオカミ駆除数の年次変動が明示され、駆除数が年を経るごとに激減していく様が見て取れる。つまりエゾオオカミの絶滅には駆除が主要因であったことが示唆されている。今となつては絶滅原因を科学的に特定することは難しいが、駆除の効果（駆除数）を見る限り、私も駆除

が大きな絶滅要因の一つであったことには賛成する。そして、駆除の他にジステンパーや狂犬病などの病気や生息地断片化、餌不足などの複合要因により絶滅したのであろう。

このように著者は北海道での絶滅要因とその過程について詳しく述べているが、本土でのオオカミの絶滅過程についてはほとんど説明していない。ホンデオオカミの絶滅には、生息地の狭小化・断片化のほうが、餌資源の減少と駆除よりも相対的に影響が大きかったのかどうかなど、もっと説明や仮説の提示が必要であつたろう。日本と同様にオオカミが絶滅した樺太や朝鮮半島南部との比較検討することにより、日本列島周辺でのオオカミ絶滅の原因、過程がより明確になると思われるので、著者には将来この方面での調査も是非おこなって欲しい。

本書では北海道におけるオオカミの捕食による馬の死亡率一覧の統計データが示されている。これを見ると明治初期には馬がかなりの確率でオオカミに殺されていることに驚かされる（死亡率100%の地域の多いこと！）。当時、馬は、軍用・農耕用以外に、特に北海道、千島、樺太では、駅逓の伝馬、つまり公私文書などの情報の伝搬に重要な役割を担っていた。政府通達などの情報通信に対する被害防除もオオカミ撲滅の動機として重要であることが本書で指摘され、目から鱗であった。

北海道では明治以降、オオカミのほかヒグマも賞金付きで撲滅の対象となっていたが、このほかにカラス類（ハシブトガラスとハシボソガラス）も賞金の対象になっていたことを私ははじめて知った。カラス類も農産物や水産物、廃棄物などを食べる「有害」鳥獣である。興味深いことにアメリカにおいてはワタリガラスとオオカミは共生関係にあるらしく、ワタリガラスはオオカミの食べ残しを狙うためにオオカミに追従し、さらには獲物のありかもオオカミに知らせているという。北海道におけるオオカミとカラス類の関係も、現代の北米でみられるような共生関係にあった可能性もある。そして、著者によれば、オオカミが絶滅した現在、カラス類はオオカミに変わるパートナーとして人間を選んだ可能性もあるという。確かにオオカミの食い残しよりも、人間の出す、生ゴミ、農畜水産廃棄物のほうが圧倒的に量が多い魅力的な餌資源であろう。オオカミ絶滅とともにカラス類は共生相手を人間にスイッチして、それが成功し爆発的に増加して、ついには人間生活に被害を及ぼしている、としたら何とも皮肉なことである。オオカミーヒトーシカーウマの種間関係のほかに、オオカミーヒトーカラスの種間関係の存在の示唆は生態学的に興味深いテーマである。ただし、著者は日本のカラスは2種類（ハシボソと

ハシブト)しかいないと述べているが、事実誤認である。Corvus 属だけでもこの他に、南日本には主に冬鳥としてコクマルガラスとミヤマガラスが、北日本には冬鳥としてワタリガラスがいる。

最後のほうの章では、生態学の誕生から、日本への生態学の導入初期の状況が説明されている。そして著者は、日本の生態学の成立には今西錦司や犬飼哲男らがオオカミの絶滅絡みで大きく関与している、という説を唱えている。柳田國男などの民俗学者が伝承や文献に基づいてオオカミの絶滅過程を説明したことに対して、彼らは自然科学者としての対抗意識を持ち、絶滅過程の説明に生態学理論を積極的に取り入れ、それが日本の生態学の発展に寄与したという。これも私にとっては意外な見解であった。

エピソードにおいて著者は、ソニー製のロボット犬「アイボ」の日本における流行とオオカミの絶滅を結びつけている。最初、私は、唐突で無理のある比較だと思ったが、この問題提起を咀嚼していくうちに、ナルホドと思い、著者の慧眼に関心した。アイボは人間が生産し、そのプログラムを制御する点において完全に人間が制御している究極のペット（コンパニオン・アニマル）である。かつて日本人（和人）は、オオカミを崇拜・畏れていたために、神社などで神として囲い込むことによってオオカミに対する精神的制御を行ってきた。さらに江戸後期あたりからは恐怖の対象ともなり、儀礼的なオオカミ狩りでオオカミを制御しようとした。そして明治以降は近代的牧畜の達成のためにオオカミを完全根絶するという制御に成功した。つまり、日本人は常に、オオカミを人間の制御下におこうとし、最終的に西欧的理念により絶滅させてしまった。このように動物の存在を人間が完全制御するという願望に合致しているのが、ロボット犬のアイボというわけだ。この指摘が正しければ、オオカミという野生のイヌ科動物を絶滅させた日本人は、元来オオカミ信仰があったために、オオカミ不在に対して心の空虚を感じ、その穴埋めとしてアイボを生み出したのかもしれない。

日本ではオオカミ絶滅と関連して、イノシシやニホンジカの増加に歯止めがかからなくなり（これだけが原因ではないことは明らかであるが）、多くの地域において農業生産、森林保全に多大な影響を及ぼしている事態は、皆さん周知の通り。今やオオカミという農業や森林の「守護神」の代わりに、「野生動物管理」なる政策を用いて、これら偶蹄類の個体群を制御せざるを得ない状況になっている。野生動物管理とはまさに西洋的発想の典型ではないか！西洋化政策を導入しオオカミ制御に成功した見

返りとして、今度は多大な努力と資金を投じて自然（シカ、イノシシ）を人間が制御せざるを得なくなったのは、誠に皮肉な結果である。現代のシカ・イノシシ問題は近代化による負の遺産ともいえる。

さて、この訳本の書評にあたり、英語の原著（Brett L. Walker. 2005. *The lost wolves of Japan*. Univ. of Washington Press）を早速購入し内容を比較してみた。苦勞された翻訳者に非礼であることを承知のうえで批判させていただくと、本書では和訳が意味不明瞭や理解するのが難しい箇所が散見される。また英語の直訳的な箇所と、古典的な日本語表現が混在し、読みにくいところもある。日本語訳文を引用する場合、重要な記述については、原典にあたることを奨める。例えば、原題の“Lost wolves...”のニュアンスとしては、「絶滅」という理系的表現よりも、文学的な「失われた…」という意味あいがあるように思える。この原著者は他にも日本史関係の本を出版しているので、日本語の文章を読み解ける能力があると思われるので、今回の日本語訳本についても自らきちんとしてチェックして欲しかった。

最後は少々辛口批評となったが、これまでの日本のオオカミ絶滅に関する研究とは異なった切口で書かれた労作である。なぜオオカミが絶滅したか（本書ではエゾオオカミの例しか詳細に述べられていないが）を歴史学、社会学的に捉えており、人と狼の関係史に興味がある人にはお勧めの一冊である。

## 引用文献

小林秀司. 2005. シーボルトの「ニホンオオカミ」—発見を巡る混乱とその背景についての試論—. 中京女子大学アジア文化研究所論集 5・6: 19-38.

大舘智氏（北海道大学低温科学研究所）

✉ [ohd@pop.lowtem.hokudai.ac.jp](mailto:ohd@pop.lowtem.hokudai.ac.jp)

## 『日本の動物園』

石田 戡 [著]

（東京大学出版会，2010年，245頁，3,780円）

私が動物園で働き始めたのは30年以上前のことである。動物園就職を志望する今の学生のように、とくに小さな頃から憧れ熱望していた職場ではなく、ほぼ成り行きの職員になったような経緯からである。

それでも、早朝から動物たちの糞尿にまみれて仕事をし、夜遅くまで飼育員たちと議論を交わしてゆく中で、動物園という存在が私にとってとても大切なものになっ